



# 追手門学院小学校の子ども

## 学校長 伊勢田 善昭

朝、登校してきた子ども達は、校門で一礼してから教室に向かいます。学校生活は礼から始まります。偕行社時代は拳手の礼をしていましたが、礼の心は今も昔も変わりません。また、下校の時は、下校班の班長が号令をかけ、一斉に礼をし、学校の日が終わります。

保護者の方々も校門で一礼をして校内に入られます。その姿を見られた外部の方から「子どもさんが礼をされるのは、先生方のご指導でできるようになるのはわかるのですが、親御さんが皆されるのはどのように指導されているのですか」と尋ねられることがあります。「学校として指導したことはありません。卒業生の保護者の方か、兄弟関係の方がされるのを見て、入学式の日から親も子どもができるようになっていきます。これも伝統の一部かもしれませんが」学校生活では、礼・挨拶・会釈・言葉づかい・作法について厳しく指導を行います。人と人との関わりにおいてまず基本となる事項です。朝の「おはようございます」から始まって、下校時の「さようなら」まで、大きな声で元気にはっきり挨拶のできる子は「挨拶の達人」として認められ、昇降口に名前が張り出されるキャンペーンも行います。

学校へのお客様に対して会釈することも大切な生活のひとつです。初めて訪問された方々から「礼儀正しいですね」とお褒めの言葉をいただくことがあります。

礼は本校の第一義として変わらざるもの、変えてはいけないものとして不動の教育方針として継承されています。しかし、まだまだ不十分な所がありますので、更に高次のレベルを目指して指導していきます。

小学校では、宿泊を伴う行事として4年生の林間学舎に始まり、5年生ではオリエンテーション、5・6年生の臨海学舎、6年生の修学旅行、冬の学校があります。これらの行事における目的はそれぞれに違う部分がありますが、基本的に小学校の教育の目指すものが集約されています。

第一に、団体訓練が基本にあり、団体生活の中で要求される社会性の育成です。例えば食事において、家庭では楽しく語らいながら食べる団樂の時ですが、公共の場として他の人と同席になった時のことを想定して静かに食べる訓練が行われます。修学旅行の時には先生が注意することがない状態になっています。宿舎における廊下の無言歩行、見学地でのマナー等社会の一員としての行動訓練が機会に応じて厳しく指導します。



入学式の日(6年生が1年生を校舎案内)

また、友達と一緒に寝食を共にすることにより、お互いを思いやる心、お互いを認め合う心を育て、自分勝手なわがままを抑える心情面の育成を図っています。子ども達にとって、学校ではわからない面をお互いに知ることにより新しい友をえることもあります。いくら厳しく指導をされても、子ども達にとって小学校生活で思い出に残っているのは、こうした宿泊を伴った行事のようです。同窓会でうれしそうに話をするのは、先生の目を盗んでの枕投げや、色々やったことです。これも、別の意味での社会性の育成かな？

本校の創設者である高島鞆之助先生が、少年時代を過ごされたのは鹿児島です。薩摩藩では、郷中教育といって年長者が年少者の教育係になるという制度がありました。ボーイスカウトがこれを参考にして作られたというのは有名です。私の小さい頃は、近所のお兄ちゃんにこま回しやべったんなどの遊びを教えてもらい、自分が大きくなったら下の子に教えるという世界でした。昔に比べて縦のつながりが少なくなっている現在、小学校では、各種の活動の中で、縦割りの活動を取り入れています。同じ交通機関を使っている子ども達を校外班として編成し、班長を中心に大阪で活動したり、緊急時の下校時に使ったりしています。朝礼で、今まで上級生に助けてもらったり、世話になったことのある人はと尋ねたらほとんどの子が手をあげました。この校外班の活動から、下級生に対して親切に面倒を見るという意識が強くなり、そして、一年生が一人で通学し始めても困った時には上級生が面倒を見ることにつながります。掃除での縦割り、他学年とのなかよし給食等、リーダーの育成をかねて今後更に充実を図っていきたくと考えています。

## 会員OBの今 大阪でジャズを演奏すること

小71中高14  
吉川 裕之

大手前校舎中庭の東側に、確か理科教室があった建物から吹奏楽部の元気なマーチのメロディーが流れて来た。それまで、生の音楽などほとんど聴いた経験もなく、音に誘われるまま部室を訪ねた・・・。すごい感激だった。

僕と音楽の出合いはこんなところからスタートした。もう40年も前のことになる・・・。

それ以来、今日まで音楽が聞かれない日が、一日もないのが当たり前という生活を過ごしてきており、いまは、サウスサイドジャズバンドという日本でも数少ない1920年代～30年代ジャズを基盤とした音楽を演奏する、プロのディキシーランドジャズバンドのリーダーを務めている。そろそろ結成30年を迎える。

自分の音楽活動を振り返ると、なにも知らないで一生懸命練習していた高校時代のプラスバンドでの活動。大学時代、はじめてジャズと出会い、七〇年安保もそっちのけで練習していた熱中時代。七〇年からアメリカへ渡り、白人バンドに加入し、米国各地でのジャズバンド演奏活動。帰国してからのプロとしてのジャズ生活、プロデューサー活動、プロダクションの経営・・・。

こう書いてみるとなにか華々しく活動してきたみたいだが、振り返ってみると、実際は音楽的には、自分の才能を過信して天狗になっていた時期、凝り固まった音楽観によるメンバーとの対立、メンバーチェンジによる音楽の再構築、バンドサウンドの独自性、方向性の確立。バンドの運営ではずいぶんエネルギーに動いてきた自負はある。

最近では、ジャズのメッカであった道頓堀、千日前を広く市民に訴求しようとミナミにある昭和初期に建てられた、元・精華小学校を使っただけのフェスティバル「ジャズシティーオオサカ」の企画運営を地元と共に、三年に渡り行っており、将来はプリザーブ

ションホール(保存音楽のジャズの聴けるホールとしての確立)とジャズ博物館の設立を視野に入れた活動を行っている。

しかし、最近の経済的環境による音楽活動、演奏機会減少の打撃はこれまでに経験のしたことがなかった状況であり、メンバー全員の生活を揺さぶるの大問題となってきている。・・・また胃が痛くなってきた。

プロの演奏家として30年近くすごしてきて、未だに毎日のように自分の音楽性と葛藤があり、さらに、プロダクションの経営者としてメンバーの演奏機会の創出にこれまで以上の企画力、営業努力が必要とされてきたこの時代、もはや、消えゆく音楽の一つとなってきたジャズを大阪で支えて行こうと決意している。これからもブレイキングマネジャーとして、メンバーと共に演奏活動を通じて大阪で音楽をやり続ける意義を再確認し、大阪的なジャズの良さを育成、継承するだけでなく、そこに、オリジナリティーの高いサウンドを創り、演奏することを目標に、したたかに音楽活動を続けてゆきたいと思っている。

「音楽」が「音我苦」にならないような音楽生活をめざし「演じる方」も、「見る方」も一緒になって楽しめる時間を共有できるライブ活動を続けてゆくことができたら願っている。

サウスサイドジャズバンド全員が集まるライブは、毎月一回、最終火曜日午後7時50分～、ウメダ・お初天神通、南へ入る、曾根崎センタービル5階「ニューサントリー5」電話、06-6312-8912。一度のぞいてください。最後になりましたが、会員各位のますますのご健勝をお祈りいたします。



平成16年1月17日(土)開催の新年会で演奏して頂きます。是非、お運び下さい。(新年会実行委員会)